



みんなで生きるワケ

今年梅雨入りがずいぶん遅れ、その分早めに到来した真夏日に、少し様子を伺いながら外遊びに向かう6月。昆虫の飼育、野菜の栽培、園庭のピワヤママモの収穫：初夏の保育日誌は生命と向き合う場面であふれていく。

はなぐみ(2歳児)の部屋でも、アゲハ蝶の羽化が間近にせまっていた。そして担任曰く、子どもたちはその「奇跡の瞬間」に立ち会うことになる。その蛹サナギの殻を破って誕生したのは：なんと数匹のヤドリバエの白い幼虫だった。思い描いていたものと異なる者の登場に、理解が追いつかない子どもたちから「動いてる!」「目みたいのあるね」「蝶々は?」と声が上がります。

アゲハ蝶の幼虫は、他の虫に寄生されてしまうことが多いことを知っていた担任は、目の前の子どもたちにもわかるように、何とか事の次第を説明すると、返ってきたのは、悲しさや悔しさといった感

情ではなく、「えー!」という素直な驚きの声だった。

そして翌日、まだ残された蛹に期待をかけながら、「この前のは、どれになっちゃったの?」と凶鑑をめくり、自分たちが目にした自然界の出来事を、真っ直ぐに理解していこうとする姿に、担任は、「やはりあの瞬間を、一緒に見ることでできて良かった」と感じたのだという(6月17日「希望の一匹」より)。

私たち地球に住む者は全て、別の生命の犠牲の上に生きている。植物を食べる蝶と幼虫を食するヤドリバエに本質的な違いはない。「生命の大切さを知る」とは、それほど単純な話ではないのだ。

それは、合点のいくこと、いかないと、色々な生命との出会いや別れを積み重ねながら、本人なりに「わかって」としていくことなのかもしれない。そこで、私たち保育者がやるべきことは、眼の前で起こっているそうした多様な生命の営みを、「ほら」とその傍らで指を差し、一緒に見つめ、一緒に考えてみることではないだろうか。

そして今、クラスではヤドリバエの蛹

も見守っていく事になったのだそうだ。

進級後の新生活もすつかり落ち着いてきたこの頃になると、その関心は足元の事からずつと周囲へと広がっていく。

このはなぐみの者たちも、今は絵の具やハサミといった道具を使ってみたいと仕方がない。そんな思いを受け、数人と七夕飾りを作っていると、絵本コーナーから「あーあ、破れちゃった。」という声が聞こえてきた。今のページをじっくりと見たい一人と、ページをめくりたいもう一人との思いのぶつかり合いで、ページが破けてしまったようだった。

同じものに興味があるからこそ繋がれるし、その分ぶつかり合いにもなる...この経験こそ大事と思いながら、自分がどうしたいのかを言葉で伝え合ったらどうかと、両者にアドバイスをした担任。

3人で敗れたページを直して保育者がその場を離れると、再び一緒に凶鑑を覗き込む2人。「同じものが大好きな2人を、微笑ましく見守った。」と日誌



知っていくために。ではその先、「他者の思いも楽しめる」ようになるには、どうしたらよいのだろうか。それはきつと、「自分の思い」が大人(時に仲間)から認められ、大事にされる経験をたっぷりと積むことだ。そうでないとい

は結ばれていた(6月21日「同じものが好きだから」より)。人間関係がぐつと深まってくこの年齢では、友だちを作ろうとか、仲良くなるうとか、そんな思いで関わっていくのではない。自分が夢中になる物事を介して出会い、関係を育み、その結果として関わりを深めていくのだ。



「他者の思いを楽しむ」なんて心の余裕は、生まれそうにない。そして、他者が好きなこと、自分とは違う価値観や能力を認めることができたなら、時にそれに刺激を受けて、想起されて、その力を借りて：仲間と一緒に、自分以上の自分になれる瞬間を味わえるかもしれない。

たくさん友だちを作るためでもなく、仲良くする術を知るためでもなく、力を合わせるためでもなく：私たちが目指したい経験は：これか。

仲間と一緒に自分を超える

園長 折井誠司

●編集 幼保連携型認定こども園せいび
●発行人 折井 誠司
●印刷所 折井 誠司
●発行所 幼保連携型認定こども園せいび
社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
電話 042-6975-1551
ファックス 042-677-5643
E-mail seibi@kodomoakyo.jp
http://kodomoakyo.jp/